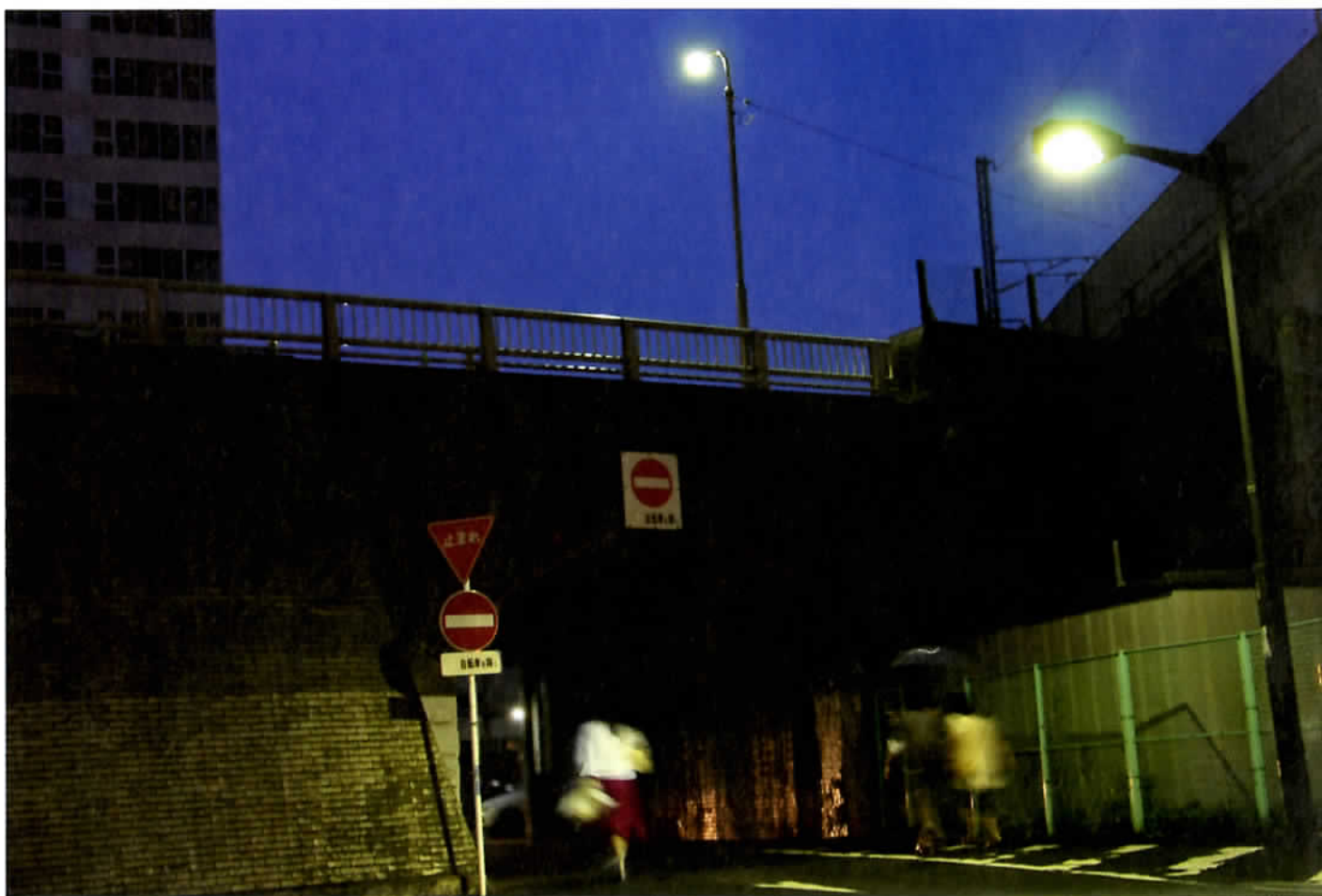


仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第十七号



X橋の夕暮れ



「いつかX橋で」
(2008年 新潮社)

文学のある風景

夕暮れ

仙台駅の駅舎を背に歩き始めてほどなく、X橋の高架橋の下に差しかかる。他人の倉庫を無断で使っている手前、交番のそばまでできるだけ通りたくないの、ねぐらへの近道ということもあり、祐輔は、朝と晩、このガード下を通り抜けて駅前広場とのあいだを行き来していた。

空襲直後は、この近辺も瓦礫と化した。特に、X橋の西側は完全に焼け野原となって、薄ら寒い光景が広がっていた。

だが、あれから十ヶ月あまりがすぎ、ほかの市街地と同様にバラックが立ち並び始め、活気が戻ってきている。むしろ、戦時中よりも賑やかかもしれない。特飲街に近いこともあり、夕暮れ時になると女を買いに来る男たちが行き交うようになり、どこからともなく集まってきた街娯が、米兵目当てに路地に立つ。

だが、今日は早めに店じまいしたこともあり、まだそれほど怪しい雰囲気は漂っていない。

X橋のガードをくぐろうとしたところで、祐輔は足を止めた。向こう側の出口近くで、数人の男たちが探めているのに気づいた。

(熊谷達也「いつかX橋で」より)

小池 光の 気になる日本語

6

「がんばる」

がんばれ。がんばってね。がんばってください。がんばります。がんばるぞ。

一日に最低一回、あるいは何度も、われわれはこの言葉を口にしているのではないだろうか。確かに世の中、がんばらなくてはならないようなことばかりだ。

「がんばる」は江戸時代にできた言葉で、それ以前の日本語にはないようだ。言葉がないのだから聖徳太子や紫式部は、あるいは平清盛や源義経は、さんざん苦勞はしただろうが生涯一度も「がんばる」とはなかったわけだ。

いま漢字では「頑張る」と書く。頑固、頑強、頑健、頑迷の「頑」を、テンション高く「張る」のでいかにも「がんばる」感じが伝わる。でもこれは後代の当て字だ。語源としては「我に張る」が「我ん張る」らしい。広辞苑にはそう書いてある。「我」を貫き通すというような意味である。

すると「我を張る」と兄弟分の言葉である。周囲を顧みず自分の言い分だけかたくなに主張するのが「我を張る」だから、感心しないころのあり方のひとつだ。「我を張る」と「我ん張る」、たったひらかなひとつでほとんど正反対の意

味になってしまったところがおもしろい。「我」なるものをいわばどっちから見ると、天地の差になってしまふ。人間は我を張ってはならないが、がんばらなくてはならないのである。

広辞苑にはまた「眼張る」という項目がでてくる。こちらもガンバルと読む。目をおかしく見開いてあたりを見渡すという意味である。「がんばる」の語源はこちらだという説もあるようだ。なるほど。それもうなずける。確かに眼に力をこめなければ「がんばる」はならない。

しかし語源はともかく、いま「がんばる」という言葉がはびこりすぎているように思う。自分や他者に対して激励、はげまし、エールを送るとき他に表現がないものだろうか。がんばらなければ生きていけない困難がたくさんあるのはわかるが、それだけでなく一方に表現の貧困、言い回しの画一化という問題がある。内実が伴っていないような気がするのだ。がんばるといえばとりあえず万事無難に済む。かたんになんでもかんでもがんばれば、がんばりますで済ます風潮に、いささかの危惧を覚える。

そういう意味で「仙台文学館はいよいよがんばります」なんていいたくない。どこか軽薄で、安直である。ではなんといいべきか。うむ、考えなければならぬ。(仙台文学館館長)

学芸室日記

○展示室劇場

春に開催した井上ひさし展にあわせ、展示室内に突如出現した「吉里吉里国立劇場」。ここで在仙の俳優たちが、井上作品のリーディングを行いました。ステージと客席が近く、密度の高い空間でのリーディングに、「狭い空間で、集中して聞き入りました」「気軽にこまめな作品を味わうことができた」と好評でした。



○井上ひさし初代館長来館

3月28日と5月4日、イベントに出席のため、ひさし先生が来館しました。「吉里吉里国」の展示室に入るなり「よくまあ、ぼかぼかしいものをつくりましたね」と、ニヤニヤ。大入り満員の展示室劇場もこっそり観劇。終了後、演じたお二人にねぎらいの声を掛けていました。

○吉里吉里国まつり

6月20日、21日の両日、なんと文学館がお祭り広場になりました。当日は、東北学院大学地域構想学科の学生さんや地元の方々の協力により、屋台が出現。独楽回しや創作和太鼓、コーラスなどのイベントも満載で、文学館を初めて訪れたお客様も、「吉里吉里国入国パスポート」を片手に、楽しんで下さいました。



○こまつ座「兄おとうと」来る!!

9月26日、27日の2日間、吉野作造・信次兄弟を描いた、井上ひさし作「兄おとうと」が、仙台市青年文化センターで上演されます。仙台文学館開館10周年の記念事業です。チケットのお問合せは、仙台文学館(022-271-3020)へ。



「ひよっこりひょうたん島」

小学生の頃、本を読むことが好きだった私は、世界の童話、昔話、ドリトル先生シリーズ、ルパンやホームズに江戸川乱歩、ファール昆虫記や伝記など、図書室にあった本はかなりの読んでいた記憶があります。でも、この一冊、といわれると、即

座に答えがでてこないのです。というの、私の子ども時代はテレビ放送が始まり、怪獣映画の創世記、少年マンガ週刊誌が刊行された頃で、本の位置が自分にとってのエンターテインメントの上位ではなかった、ということかもしれせん。そ



んなことを考え始め、この原稿を引き受けたこと自体を悔やみ始めた時、私は仙台文学館の初代館長が井上ひさしさんであることを思い出したのであります。私にあって、揺るぎない作品が！それは「ひよっこりひょうたん島」です。これはテレビ番組でしたが後に台本が文庫で出版されました。本屋で発見した時は感激してその場で購入し、ニコニコ顔で家に帰った記憶があります。その後ももちろん全巻揃えました。そういう訳で少々変則的ではありますが、この「ひよっこりひょうたん島」を私の一冊にさせていただきます。

放映されていた当時、次にどう展開するのか気になって、夕方5時45分までには必ず家に帰りテレビにかじりついていた私でしたが、今のように人気番組のCDが出たり、ムックが出たりという時代ではなかったもので、どうしても欲しいものはすべて手作りでした。

「ひよっこりひょうたん島」の「ひよっこりひょうたん島」を私の一冊にさせていただきます。放映されていた当時、次にどう展開するのか気になって、夕方5時45分までには必ず家に帰りテレビにかじりついていた私でしたが、今のように人気番組のCDが出たり、ムックが出たりという時代ではなかったもので、どうしても欲しいものはすべて手作りでした。

あわただしい十五分間でした。平成に入った頃、伊藤悟さんという方が「ひよっこりひょうたん島」の研究本を出されたのを知り購入して読んだところ、やはり小学生の頃に番組の内容を書き写していらつしやつたようなのですが、その密度の濃さに驚き、上には上がいるものだ、大人になった私は今さらながら奇妙な敗北感を味わうこととなったのです。

を買って住もう！という話で盛り上がり、地図帳を広げてどの島を買うかを相談したのです。買う島が決定すると、その島の地図を画用紙に拡大して、誰が、どこに、どんな仕事をしつづ住むのかを書き込んでいくのです。休み時間ごとに集まって話し合い、夢はどんどん広がりました。いや、あの時私たちは、将来必ずみんな住むつもりでいたのです。

に、しかも子どもにわかりやすく描いてあることに驚かされました。しかしそれは、大人になったからこそ感じたことで、子どもの頃はただただおもしろい人形劇だったので。いくらりつばでもつもらしい事を伝えようとしても、子どもにとってそれが楽しくなくては、何も伝わらないと思いますし、おもしろい！と思った時に初めて耳を傾けてくれるのではないのでしょうか。

「ひよっこりひょうたん島」を書かれていた頃の井上ひさしさんも山元護久さんも「大人が子どもを教導く」という文部省の押しつ

けをこわそうとしていらしたと知り、やはり子どもたちの味方でいてくださったのだなあと思っております。学校や大人が、いい話として契める本がつまらないとは言いませんが、大人の思いだけで押し付けることは、本嫌いの子どもをつくる原因のひとつではないかと思えます。

何よりもうれしいことです。「ひよっこりひょうたん島」のDNAをからだの一部に受け継いだ私は、あのワクワク感を今の子どもたちに伝えるたいと思いつつ、今も作品を描き続けているのだ。

今、改めて「ひょうたん島」を読むと、社会のしくみや人間関係の複雑さ、国家間の軋轢など、大人になって体感するありとあらゆることを皮肉たつぷり

「ひょうたん島」を書かれていた頃の井上ひさしさんも山元護久さんも「大人が子どもを教導く」という文部省の押しつ

私の本を読んで本を読む事が好きになったという話を聞いた事がありますが、まずはお話のおもしろさを、ページをめくる楽しさを知ってもらうことが第一歩だと考えている私にとって



原ゆたか(児童書作家・絵本作家)
1953(昭和28)年、熊本県生まれ。1974年、KFSコンテスト・講談社児童図書部門賞受賞。おもな作品に「ちいさなもり」(フレーベル館)、「かいけつゾロリ」シリーズ、「ほうれんそうまん」シリーズ、「サンタクロース一年生」(以上ポプラ社)、「プカブカチョコレー島」シリーズ(あかね書房)、「よわむしおばけ」シリーズ(理論社)、「モグルはかせ」シリーズ(偕成社)、「日本のおぼけ話・わらい話」シリーズ(岩崎書店)、「ザックのふしぎたいけんノート」シリーズ(メディアファクトリー)など多数。

かいけつゾロリとなかまたち 仙台文学館に来る!!

今夏10回を数える「こども文学館えほんのひろば」。今年は小学生に大人気のかいけつゾロリとそのなかまたちがやってきました。初日から待ちかねたように多くの子どもたちが訪れ、ゾロリと写真を撮ったり、「ゾロリしんぶん」を書いたり、また熱心にバックナンバーを読んだり、思い思いに楽しんでいました。



原ゆたか先生来館

7月22日、著者の原ゆたか先生が来館。完成間際の展示室でゾロリと対面し、ゾロリに変身して写真撮影。



その写真を「ゾロリしんぶん せんだいぶんがくかん版」に貼り付け完成。まず自分が楽しむ!のが、「ゾロリ」執筆の秘訣です

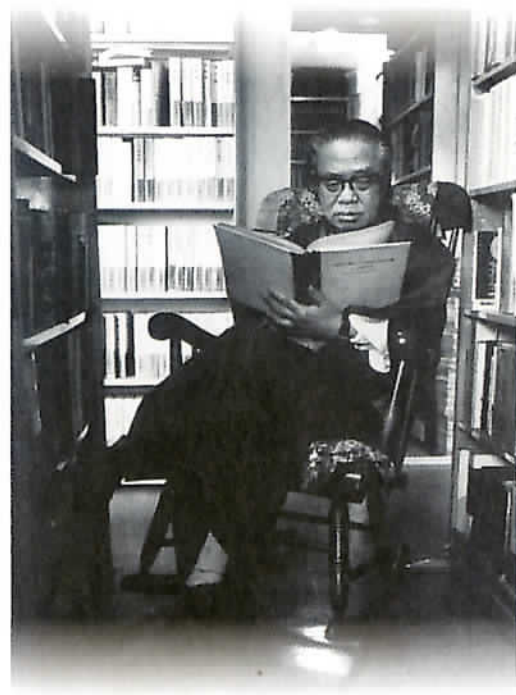


「ひよっこりひょうたん島」(1)
井上ひさし・山元護久
筑摩書房

生誕一〇〇年記念

松本清張展

「砂の器」「点と線」「黒革の手帖」など、作品が次々と映像化され、今も新たなファンを獲得しつつある、作家松本清張。今年、清張生誕一〇〇年にあたり、全国五箇所での巡回展が開催されます。仙台文学館では、10月1日から11月23日まで「松本清張展 清張文学との新たな邂逅」を開催します。



写真提供 文藝春秋

松本清張の生涯

松本清張(本名・きよはる)は、一九〇九(明治四十二年)北九州の小倉に生まれました。向学心に燃える少年でしたが、生家は貧しく進学を断念し、一家の働き手として奮闘します。学歴社会の壁に悔しい思いをしつつも、不屈の精神力で道を切り開き、朝日新聞西部本社に意匠係(広告版下の作成)として勤めていた一九五〇(昭和二十五年)、「週刊朝日」の懸賞小説に、「百科事典の解説」にヒントを得た「西郷札」を応募し、入選。一九五三(昭和二十八年)には、「或る『小倉日記』伝」で、第28回芥川賞を受賞します。時代や社会と対峙したその作品群は、多くの人々に愛読されました。創作範囲は評伝小説や推理小説にとどまらず、現代史に切り込んだノンフィクション、さらには古代史の世界へと広がり、数々の作品を著し、一九九二(平成四年)、82歳で亡くなります。

世田谷文学館にお邪魔しました

巡回展のスタートは世田谷文学館(4月11日〜6月7日)。映像化された「砂の器」のテーマ曲が流れる展示室には、幅広い年齢層の方々が訪れていて、改めて清張人気を実感しました。今回の展示では清張の原稿や取材メモ、色紙などの直筆資料のほか、古代史調査の中で収集した愛用美術品などが展示されます。松本清張記念館制作のオリジナル映像も見どころです。



世田谷文学館での展示



取材ノート



「或る『小倉日記』伝」原稿

清張語録

人間を描きたい

「私は、何によらず、動機というものはすべての人間の犯す罪において、いちばん大事な点ではないかと思っています。(中略)動機を追求するということは、すなわち性格を描くことであり、人間を描くことに通じるのではないかという考えをもっているのです。」
(「推理小説の発想」)

創作の信念

「小説は、やはり読んでおもしろくなければならぬと思うから、私はプロットにできるだけの語性をもたせようとしている。」
(「私の小説作法」)

内なる孤独

「私は高等小学校だけで、上の学校には行けなかった。以前はいろいろの事情で悩んだことがあるが、現在は消えている。ただ、進学できなくて残念なことが今でも一つある。それは友だちが居ないことである。(中略)人づきあいが下手なのは、そこからもきている。」
(「私のくずかじ」)

清張作品の魅力

清張作品は話の展開が巧みで、読者を最後まで引き付ける力を持っています。また犯罪トリックに重きが置かれがちな中、人間の心の奥底に潜む、嫉妬や欲望などの感情を掘りあげ、罪を犯す人間の動機に焦点をあてた作品を描きました。



「或る『小倉日記』伝」(新潮文庫)

「昭和史発掘」(文春文庫)



「点と線」(カッパノベルズ)



写真提供 文藝春秋

宮城が登場する作品

「白い闇」

初出誌：『小説新潮』昭和32年8月
『松本清張全集』36巻収録

北海道出張から戻らない夫・精一を案じる妻・小関信子。精一の従弟の高瀬俊吉から、夫には青森に田所常子という女がいたと打ち明けられるが、その女も自殺をしてしまい、夫は行方知れず。真相は…。仙台で旅館を経営する、常子の兄・白木淳三が物語のキーパーソンとして登場。

青森、仙台、松島と取材して書き上げた作品で、場所をつなぎ合わせて一つの話に纏め上げるのに苦労したと振り返っている。

「中央流沙」

初出誌：『社会新報』昭和40年10月号
～昭和41年11月号
『松本清張全集』45巻収録

農林省の汚職事件が発覚。すべての罪を課長補佐の倉橋豊にかぶせ、事件の幕引きをはかる食糧管理局長・岡村福夫ら上層部。岡村の部下・総務課事務官の山田喜一郎という官僚の眼を通して、その事件が語られる。倉橋が自殺にみせかけて殺害される舞台となったのが仙台的作並温泉。



『中央流沙』(中公文庫)

「殺人行おくのほそ道」

初出誌：『ヤングレディ』昭和39年7月～昭和40年8月
初出題「風炎」より改題

主人公の倉田麻佐子は、大学講師の叔父・芦名信雄と、銀座で洋服店を経営する叔母・隆子の仲の良い夫婦に、大きな隠し事があることを知る。その後、叔母をめぐる人々が「おくのほそ道」のゆかりの土地で次々と殺されていく。悲劇は5年前、麻佐子が叔父と出掛けた「おくのほそ道」を辿る旅に起因していた…



「殺人行おくのほそ道」(講談社文庫)

「奥羽の二人」

初出誌：『別冊文藝春秋』39号
昭和29年4月

戦国の世を舞台に、奥羽で対立する伊達政宗と蒲生氏郷。豊臣秀吉の前にその志を断たれた二人の武将の懊悩を描く歴史小説。

ライブ文学館 松本清張特集(仮称)

11月上旬開催予定
清張作品の朗読、作家のトークを予定しています。
詳細は当館のホームページ、市政だより等でご案内します。



メディアテークの前で頭をひねる2人

「まちかど文学タイムトラベル」

それは一本の電話から始まったのでした
五月のある昼下がりのこと。ワタクシ「W」は、せんだいメディアアテークの学芸員「S」さんから突然お電話をいただきました。なんでも「まちかど文学タイムトラベル」という企画に仙台文学館も協力してほしいのだそうです。



こんなステッカーを見かけたら……

W 「ところでSさん、「まちかどタイムトラベル」って何ですか？」

S 「簡単に言えば、街角に貼ってあるQRコードをケータイで読み取ると、その場所が昔どんな風景だったのかを写真で見ることが出来る仕掛けです。去年、「仙台宮城デスティネーションキャンペーン」の開催をきっかけに始めました。

今は、実際に現地に行かなくても情報だけならテレビや雑誌、インターネットなどいろいろな方法で手に入りますよ。でも、その場所が風景や音、空気を体で感じることに勝る体験はないはず。

これに今年は仙台文学館も参加してほしいんです」

W 「それで、私たちは何をすればいいの？」

S 「まず、仙台の街が舞台になっている小説や詩の作品の中から「お奨めシーン」を選んでく

ださい。そして、そのシーンに係のある写真などがあたら提示してほしいんです。

そのシーンゆかりの場所に訪れた人が、そこに貼ってあるQRコード送信すると、ケータイの画面にその作品の風景や解説が表示されるようになります」

W 「なるほど。それなら島崎藤村や土井晩翠、魯迅をはじめ候補はたくさんありますよ。宮城、仙台は名だたる歌枕の地、歌碑や句碑など古典ネタにも事欠かないし。」

S 「Wさん、イニシエの作品もいいんですけど、できれば新しい作品の方が。最近、仙台が舞台のヒットが目立ちますよね？」

W 「うーん。でもね、詩や小説ってイメージネーションの世界だから、「ココがこの作品の、そのシーンの場所」とはつきり書いてあるとは限らないと

思うの。むしろ、それがあからさまにならないように、って書く作家が多いんじゃないかしら？」

例えば、伊坂幸太郎さんの「重力ピエロ」に出てくる霧の中の校庭はこの小学校？なんて、読み手によっても結構、見解が違つたよ。作家の方が「ここですよ」って種明かしてくれるはずもないし。まあ、宝探的な楽しみならあるかもしれないけれど。

それに、今の仙台を舞台にした作品を選んで、もしも場所が特定できたとしても、ケータイに配信できる風景は、まさに今

何度かこんなやりとりを繰り返しながら、仙台の街角で文学トリップを楽しんでいたための準備を進めました。明読の配信については在仙の作家の伊坂幸太郎さん、熊谷達也さん、三浦明博さんのご了解と音訳ボランティアの方からご協力が得られました。スタートは8月2日。仙台においての際は、是非アクセスしてみてください。http://www.sml.jp/machikado/

仙台文学館名物「杜の小径」の特製メニュー

工夫を凝らしたメニューはいつも大好評だ。文学館とともに

一〇周年を迎えた杜の小径の店長・三山タエ子さんにお話を聞いた。



「旬にこだわって食材を選び、味も栄養も見映えもすべてにわたってバランスを大切に作る」三山さんの思いと苦勞が隠し味の特製メニューはこれまでに27点。もう一度食べてみたいメニューはどれか、人気投票を実施したところ、1位は「マドンナのランチ」(夏目漱石展)、2位は「海坂藩の食卓」(藤沢周平展)だった。



「藤沢周平展の『海坂藩の食卓』は、昔から藤沢ファンだった私にとって、特別な思いのこもったメニューです。一番たくさんの方に召し上がっていただけたのもこれ。3年も経つのに、皆さん覚えていてくださったのがうれしい。でもね、品数が多いし、棒鮭を仕込むのに途方もなく時間がかかって。一番と苦勞の多かったメニューでもあるんですよ」棒ダラの煮物、むきそば、民田なすの漬物 etc.

「杜の小径」の特製メニューは

いかが？

「先週末、北九州の小倉まで泊三日の「取材旅行」に主人と行ってきたんですよ」と三山さん。この秋に開催される「松本清張展」の特別メニューの準備は、インタビューを行った六月半ばの今、すでに始まっていた。

「松本清張記念館と北九州市立文学館はもちろん、小倉の街中を歩き回っては食べ、食べ歩き回る三日間でした。「砂の器」で刑事がおでんの屋台で語り合う場面があるので暖簾をくぐってみたり、偶然入ったお店で焼きうどんを食べた時「焼きうどんの発祥地は小倉だよ」とて店の親方に教えられたり。今回もたくさん収穫がありましたよ」

メニューを考えるときに三山さんが心掛けてるのは、「とにかく作品を読み込み、ゆかりの地に足を運んで、作家が本当に好んだ料理を見つける」ことだ。例えば瀬戸内寂庵展の準備には、寂庵さんが現代語訳した「源氏物語」を二度も通読した。読み進めながら情景と味の接点を探っていくと、眠りに就くのはいつも日付をまたいでしまった。草野心平の故郷・いわき市まで往復五百キロメートルの長旅ではメヒカリの美味しさに出会った。い

つものようにハンドルはご主人が握ってくれた。

作品にとことん向かい合って考へ抜き悩ま抜く。書簡や評伝などにも丹念に当たって、手掛かりを探る。「どうしても分らなくなったら学芸員さんに相談してみると、パッと本を紹介してくださ

たり、ヒントをくださった。頭の中の九十九パーセントを作家の世界で満たしていると、日常生活の中で食材や調理の組み合わせのアイデアが次々と湧いてくるんです」

一つの企画展が開幕するやいなや、次のメニューの準備がスタートする。お店を切り盛りしながら、調査と試作と味の仕上げのためには少なくとも三か月以上は費

やしているわけだ。

一番苦勞したメニューはどれですか？ と尋ねると、返ってきた答えは瀬澤龍彦展の「ランティエの食卓」だった。

「上流階級の食事って、縁がないから想像もつかない。作品も難しく。ある方が昔、瀬澤さんがレストランでビーフシチューを注文しているのを見かけたよ」と教えてくださったのをヒントに早速作ってみたいものを、それだけではどこか物足りない。そこで旬のキングサーモンのムニエルを取り合わせることにしたんです。

ところが、始まった展示を見てびっくり。咽喉がんのため長く入院していた瀬澤さんが書いた、退院した時に食べたいもののリストが展示されていたのですが、そこにビーフシチューとサーモンと書いてあったんです」

作家、作品、お客さん、支えてくれるスタッフ、家族、アイデアの提供者。それらが絶妙の頃合いと趣加減で組み合わされた時、奇跡のように料理が誕生する。

「料理は出会い。次は誰が来るのかな？」といつもドキドキしています。これからも、一人でも多くの作家に出会い、一つでも多くの料理を作りたい」

「紅葉賀」瀬戸内寂庵展

「寂庵さんご本人も喜んで召し上がってくださいました」
鮭のホワイトソース、牛肉とごぼうのうま煮、純全箱入りピーツの一口スープ etc.



「菜心の膳」扇畑忠雄展

「先生への感謝の気持ちを込めて食材にはことのほか力を入れました。こんなに凝ってしまえば儲けは出ないものと覚悟していたのに、お弟子さんたちに大好評で、どうにか販売になりました」
白身魚のあんかけ、ホタテの煮物、すぐき菜 etc.



「ランティエの食卓」瀬澤龍彦展
「龍子夫人にも召し上がっていただいたら、たいへん喜んでくださいました」
ビーフシチュー、鮭のムニエル etc.



たとえば「アヒルと鴨のコインロッカー」(2003年 東京創文社のシーンが…)



文学館の住人たち - その3 -

ヒマラヤシダ
仙台文学館の入口に、ひときわ高く聳え立つのは、ヒマラヤシダ(ひまらや杉)。当館のシンボルツリーです。時折、木の下でお弁当を広げてくつろぐお客様の姿が見られます。鳥の卵のような「まつかさ」は、冬になると、「クリスマスの飾りにするのよ」と拾って帰る方もいらっしゃいます。

